

上野殿御返事

弘安元年九月十九日 五七歳

塩一駄・はじかみ送り給ひ候。

金^{こがね}多くして日本国の沙^{いさご}のごとくなれば、誰かた^宝からとして、はこのそこにおさむべき。餅多くして一閻浮提の大地のごとくなれば、誰か米の恩^重をおもくせん。今年は正月より日々に雨ふり、ことに七月より大雨^暇ひまなし。このところは山中なる上、南は波木井河、北は早河、東は富士河、西は深山なれば、長雨・大雨、時々日々につゞく間、山さ^裂けて谷をうづ^埋み、石ながれて道をふせ^防ぐ。河た^猛けくして舟わたらず。富人なくして五穀^乏ともし。商人なくして人あ^集つまる事なし。七月などはしほ一升を^塩ぜに百、しほ五合を^錢麦一斗にか^換へ候ひしが、今は^全せんたいしほなし。何を以てか^換かうべき。みそも^味たえぬ。小児のち^乳をしのぶ^慕がごとし。かゝるところにこのしほを一駄給ひて候。御志、大地よりもあつく虚空よりもひろし。予が言は力及ぶべからず。たゞ法華経と釈迦仏とにゆづり^譲まいらせ候。事多しと申せども紙上には^尽つくしがたし。恐々謹言。

弘安元年九月十九日

日 蓮 花 押

上野殿御返事